

# OfByForコラム 地域の 地域による 地域のための Something NEWS

第25回

## 「自然」vs「至然」

一般社団法人 光楓座  
一般社団法人 e f c o . j p  
代表理事 佐藤建吉

### いま、新しい時代のために必要な言葉

佐藤建吉

▼生き物としての  
ヒト、人間、人類

現在、世界の人口は74億ともいわれているが、正確な統計はない。動物の数は全く不明であるが、その種類は100万種もあるという。ほかに植物や細菌類などを含めると、生物の種類は100万種にもなる。

不思議なことは、そうした生物の存在する理由と、その進化の仕組みである。誰が設計し、進化を促しているのだろうか。それは、まさに「生き物」といわれる所以であり「なまもの」でもある。さらにその活動には、何らかのエネルギー

の摂取が必要であり、太陽のため、環境に適応する進化を為し、不思議や驚嘆に満ち溢れている。

人類は、他の生物と比較すると、地球という環境において、特異な存在である。エネルギーも食糧も人工的に作り出す。その行為は、地球に大きな負担と、環境負荷を与えた。エネルギーの獲得の代償として大きな副作用をもたらした。

それは、エントロピーという術語で、「エントロピーの増大」として、識者も政治家も予見できない自明な行為であった。人類のもつ弱点の結果、人類のもつ弱点の結果でもあった。

いま、求められているのはポスト原子力の時代である。それは、「再生可能エネルギー」の時代でもあり、「自然エネルギー」の時代と同義語である。すなわち人類の新たな適応は、「自然回帰」とあるといえる。

この新たな時代へ向かうために、新しい言葉を造り、提案したい。「至然」である。これも「しぜん」と読む。再び時代を「〜から」の from の

#### ▼人間の特殊性

人類は、有史以来、手工と火の利用、そして言語を獲得し、他の生物と異なる進化を為し、文化を造り出してきた。人類以外の生き物においても自然の中で種の生存と繁

#### 訂正

著者の執筆した本紙の「2018年新春特別号、年頭所感」(2018年1月8日発行、第95号18ページ)『水素時代は誤記で、21世紀と訂正いたします。』

さて、日本人が生きてきた背景においては、日本という現場があった。先住民との過激な紛争は行わず、融和しながら、日本列島の現場地域で土着的な地域風土の文化を育んできたのが日本人の祖先であった。

いまから1万年ほど前からこの出来事であった。その過程で「言葉」が発達した。最初は音で、その後、文字を使い、大陸からの漢字の移入、ひらがな、カタカナが駆使された。こうして、日本語が

#### ▼日本語の成立

その中でも特異な存在である「ヒト」は、同じく生命種であるほかの動物とともに群れをつくり、敵や危険に対策する「人間」として、さらに社会を構成して知恵ある「人類」として、ほかの生物に影響を与えてきた。

「自然」と「〜へ」の to の「至然」の対比である。この「至然」を、筆者のPCで用いていると、人類がもたらした「本来のそのまんま」の状態に戻そう、帰ろうという意味を「しぜん」と入力するから変質、変容した「自然」を、もう一度、ある「至然」が候補として出てくる。

#### ▼至然(しぜん)

「ヒト」は自然の中の存在であるが、「人類」は、もはや自然の中の存在ではなく、自然を制御する生命種である。中世



自然回帰として筆者が手植え栽培した無農薬コシヒカリ

連載・イベント・バッテリー